

日本における授業研究の展開

〔研究目的〕

本研究は、大学と学校との連携による授業改善のための知見を得ることを目的として行った。そのために、かつて日本のお家芸とされた「授業研究」に焦点を当てた。授業研究には、第一に現場の教師が主導した民間研究団体（以下、民間研と記す）による研究、第二に教育委員会など教育行政機関が主導した研究があるほかに、第三に1960年代以降、大学と学校教育現場との間で行われるようになった研究がある。本研究では、とりわけ第三の大学と学校との共同研究に着目しつつ、学校教育現場における授業改善に対し大学が果たする役割を模索し、共同研究のモデルを開発することを課題とし、議論を積み重ねた。



▶コロキアムの様子

〔研究経過〕

そもそも、日本における授業研究が国際的に認知され、各国で授業研究がおこなわれるようになった契機は、心理学者スティグラー（J. W. Stigler）らによる *The Teaching Gap: Best Ideas from the World's Teachers for Improving Education in the Classroom*（邦訳、湊三郎訳、『日本の算数数学に学べ 米国が注目するjugyou kenkyuu』2002年）であった。この研究はIEAによる第3回国際数学・理科教育調査に伴って実施された。調査結果から、日本、ドイツ、及び本国アメリカを対象を絞り、これらの国々の中学校における授業の比較を各地で撮影した授業ビデオに基づいて調査が行われた。調査の結果、日本の中学校の授業は、特に質の高い授業が行われていると評価され、その授業を成り立たせる種々の要因が分析された。

彼の研究成果は本国アメリカの学校教育に大きな衝撃を与え、教育改善への取り組みがなされるようになった。加えて、アメリカ国内にとどまらず、日本の授業研究は国際的に着目されるようになり、“lesson study”のみならず、“jugyo kenkyu”と訳されて、世界に知られるようになった。

では、このような授業研究は、日本のこれまでの学校教育においてどのようにして生まれてきたのだろうか。このことを明らかにし、かつ今後の授業研究の展望を得るべく、日本教育方法学会編『日本の授業研

究』（上下巻）をテキストに、研究を行った。

前期はテキストの構成に従って研究分担者とともに上巻を検討した。上巻においては、1960年代における授業研究の成立とそれ以降の展開、各教科の民間教育研究団体における授業研究を検討したのち、授業研究と教員養成や現職教育の関係といった高等教育とも深いかわりを持つ内容を検討した。

後期は下巻をテキストとし、先の *The Teaching Gap* 以降のアメリカにおけるレッスンスタディ研究の展開を検討するとともに、授業研究において重点的になされてきた教材研究、特に教科書研究と授業研究に関する研究や、各研究団体における多様なアプローチを検討した。

〔研究成果〕

以上の研究経過を経て、スティグラーらが着目した日本の授業研究の特質として、次の5点が挙げられた。授業研究は「長期的・持続的モデルに基づくこと」、「児童・生徒の学習に不断に焦点化されること」、「学習指導をその場面の中で直接改善することに焦点化されること」、「共同的な取り組みであること」、そして、「授業研究に参加する教師は、それが自己の専門的能力に対してだけでなく、学習指導に関する知識の開発にも貢献するとみていること」であった。

これらの特質は、日本における授業研究の展開の中で形成されていった。1960年代、大学と学校教育現場との共同授業研究がおこなわれるようになったことを契機に、70年代には学校の内外で授業研究が確立された。同時に学校外では、民間研が活動の幅を広げ、教育内容の現代化を包摂しながら、学校教育に多大な影響を与えた。しかしながら、教育内容の現代化は、教育内容の増大をももたらし、児童生徒の学習負担を増大させた。学校で「荒れ」が目立つようになり、民間研では「楽しい授業」が探求され、学習指導要領においても新学力観の影響を受けたものが制定された。をこうして、90年代頃からは、学び論の台頭し、今日に至る。このように、それぞれの時代で授業研究の潮流が生成され、今日の授業へと至っている。

本研究では、こうした流れを理科と国語科を具体例として検討した。加えて、現在授業研究が普及しつつある高等教育における授業研究に着目することで、授業研究の展望を得た。

（文責：大下 卓司）